朝の法話　第八回　七月一九日

全校のみなさん、おはようございます。

いよいよ一学期が終わろうとしています。四月からスタートしておよそ三ヶ月ですが、西高祭など大きな行事もあり、特に一年生は新しい生活の中で、慌ただしくあっという間に時間が過ぎていったと感じる人もいると思います。

これで夏休みに入りますが、時間ができる分、よく考えて生活したいものです。気をつけないと、自分を惑わせるさまざまな誘惑に振り回されてしまいます。

今日は、お釈迦様のお話を紹介します。若き日のお釈迦様は、「さとりを開くまで何事があってもこの場を立たない」と固く決意し、菩提樹の木の下に座り、瞑想に入りました。そして、真理に目覚めようとするお釈迦様のもとに悪魔たちがやってきて、さまざまな手段でお釈迦様がさとりを開くことを阻もうとします。この出来事を「降魔（ごうま）」と呼びます。お釈迦様が真理に目覚めてしまうと、人間の自己中心的な心や愚かさをエサにしている悪魔達は自分たちの立場が危うくなるので困るのです。

はじめに、悪魔は美女の姿になってお釈迦様を誘惑しました。つぎに軍隊となって武力と権力を使ってお釈迦様を脅しました。最後に、悪魔は大地を揺るがせました。これは、その人の依って立つところ、つまり信念を揺るがすということです。お釈迦様を不安にさせようとしたのです。

私たちも、何かを頑張ろうとすると、自分を揺るがすさまざまな誘惑に襲われることがあります。お釈迦様の「降魔」の出来事と同じです。楽しそうなものや楽な方に流されてしまいそうになりますし、自分のしていることに自信がなくなることもあります。そのような思いを打ち消すことは私たちにできるのでしょうか。

この「降魔」の出来事で大事なのは、お釈迦様は悪魔を退治したのではなく、悪魔の正体を見抜いた、ということです。お釈迦様は、悪魔は自分の外側ではなく内側にあると見抜かれました。正体を見抜くと、悪魔は自然と力を失うのです。こうしてお釈迦様は、問題を解消する道ではなく、問題の正体を正しく見る道を説かれました。

仏教で物事を正しく見ることを「正見（しょうけん）」と言います。夏休みに入る前に、この「正見」ということをよく考えたいものです。